

## 第 29 回 ドイツ語教育研究ゼミナール報告 (Y. Konishi) [J]

第 29 回 ドイツ語教育研究ゼミナールは、2025 年 3 月 17 日から 19 日の三日間、けいはんなプラザ（京都府相楽郡精華町）にて開催された。

今回の教育研究ゼミナールでは、フィリップ大学マールブルク（Philipps-Universität Marburg）から Kathrin Siebold 教授を招待講師として招聘した。Siebold 教授は外国語および第二言語としてのドイツ語（Deutsch als Fremd- und Zweitsprache）を専門とし、対照語用論、話し言葉研究、インターアクション研究、教育における協働に関する研究、教授法と方法論、ドイツ語教師の専門性の向上などに取り組んでいる。特に教授法と方法論の分野では、新しい教育・学習形態やプロジェクトワーク、協働研究、学習における自律性、学習ストラテジーの研究に注力している。

ゼミナールのテーマおよび参加者は以下の通りである。

総合テーマ：「教師同士で協力する環境における、ドイツ語教師の生涯にわたる専門性の向上」（Lebenslange Professionalisierung von DaF-Lehrenden in kollegial-kooperativen Settings）

参加者：赤木祐美子（甲南大学）、Czyzak Olga（中央大学）、出島恒太郎（学習院大学・大学院生）、Dieth Regine（同志社大学）、Gildenhard Bettina（同志社大学）、堀口順子（九州大学、福岡大学）、Imig Alexander（中京大学）、伊藤港（学習院大学・大学院生）、梶浦直子（中京大学）、亀井明子\*（関西学院大学）、Kanematsu Nina\*（筑波大学）、小林大志\*（東北大）、小池駿（早稲田高等学院）、Koizumi-Reithofer Eva（東京学芸大学）、小西優葉（上智大学・大学院生）、草本晶（麗澤大学）、Lang Heiko（立教大学）、丸山智子（Goethe-Institut Tokyo）、Müller Beate（京都産業大学）、中川慎二（関西学院大学）、那須妙子（那須弘一美術館）、太田達也（南山大学）<sup>1</sup>、齋藤正樹\*（早稲田大学）、Schart Michael（Friedrich-Schiller-Universität Jena）、Schmidt Maria Gabriela\*\*（日本大学）、Sugimoto Monika（京都外国語大学）、Tashiro Luisa（京都大学）、牛山さおり\*（立教大学）<sup>1</sup>、Vögel Bertlinde（大阪大学）、Waychert Carsten\*（京都産業大学）、Yanagita Nancy\*（獨協大学）、渡辺脩太（DAAD）、Janczak Klaudiusz（DAAD, Assistant）（アルファベット順、\*\*実行委員長、\*実行委員、<sup>1</sup>オンライン参加）

### 第 29 回 ドイツ語教育研究ゼミナールプログラム

	17.03	18.03	19.03
Vormittag		Vortrag 2	Workshop 3
		Workshop 1	Ergebnissicherung und Auswertung

Nachmittag	Anreise	Vorträge Teilnehmende	Abreise
	Begrüßung und Kennenlernen		
Abend	Vortrag 1	Vortrag 3	
	Einstieg	Workshop 2	
	Begrüßung von GI & DAAD	Abendliche Zusammenkunft	

## 1. 招待講師による講演およびワークショップ

### 【講演 1】

初日午後に行われた講演 „Lebenslanges Lernen – Ansprüche und Realitäten im Berufsalltag“ は、専門職としての DaF の定義の見直し、日本におけるドイツ語教育という文脈においてみたときのドイツ語教育の捉え直し、生涯にわたる専門性の向上における基礎的構想の三点の理解を目標に進められた。講演内容は「専門性」と「生涯学習」の二部構成で行われた。「専門性」についての講演では、DaF 教師として求められる能力や役割の再考を行った。その際、参考として Schart/Legutke (2016) による能力モデルと、ドイツ語教育機関共同プロジェクトによる語学教師のためのスキルチャートの二つの比較参照を行った。「生涯学習」についての講演では、教師の生涯学習を達成するための概念として、自律性 (Autonomie)、内省 (Reflexion)、そして協力 (Kooperation) の三つを取りあげ、それぞれの概念の重要性や具体的な実践方法が紹介された。

本講演は全体を通して、DaF 教師の立場と役割、そしてそこに求められる能力の見直しと、生涯学習の在り方に重点を置くものだった。

### 【エントリータスク】

講演 1 の後、ゼミナールの開催に先立って配布された準備課題と講演内容についてグループ内および全体で議論が行われた。準備課題では、講演でも紹介されたスキルチャートに基づいて、教師が各自の教授スキルについて自己評価を行った。そのうえで二つのスキルチャートを比較し、それぞれの特徴や視点の違いを話し合った。

### 【講演 2】

二日目午前に行われた講演 „Kompetenzerwerb in globalen und lokalen Bildungskooperationen“ は、国際的な教育協力研究の現状と展望を概観した。特に言語習得と、DaF 教師としての専門性形成において、国際交流を通じた学びの機会と過程に焦点が置かれ、実際に行われた協力プロジェクトから具体的な事例も紹介された。講演は「教育協力研究への手引き」と、「インターアクションとスキル習得の実証研究」の二部構成で行われた。「教育協力研究への手引き」についての講演では、DaF における教育協力の重要性や、

国際的な教育協力研究の多様性がチャートを用いて説明された。また DaF 教師及び研究者の専門性の向上を目的に設立されたプロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ (PLGs) が具体例として取り上げられ、その成果が報告された。最後に、今後の教育協力に関する研究の必要性が強調された。続く「インターアクションとスキル習得の実証研究」についての講演では、ポーランドのアダム・ミツキエヴィチ大学 (Uniwersytet im. Adama Mickiewicza)、ドイツのフィリップ大学マールブルク (Philipps-Universität Marburg)、オランダのラドバウド大学 (Radboud Universiteit Nijmegen) による三ヶ国共同プロジェクトの実証研究を通じて、国際交換・交流によるドイツ語教育実践の成果が提示された。国際交流の文脈で教師に求められるスキルが整理され、またプロジェクトにより獲得された能力についても報告がなされた。

全体を通じて、国際的な教育協力に焦点がおかれ、研究の現状と実践研究の報告が行われた。そのうえで、更なる研究の必要性が強調された講演であった。

### 【ワークショップ 1】

ワークショップ 1 では、「教師同士の授業参観」と「語彙の意味付け手法」の二つのテーマを取り上げ、それぞれ可能性と課題について議論を行った。「教師同士の授業参観」に関する議論では、他者の目による授業観察がもたらす可能性として、異なる視点からの指摘によって授業の更なる発展が期待できる点が挙げられた。一方で教師同士の授業参観の普及を妨げる主な要因としては、授業観察という活動が、「評価」や「批判」といったネガティブなイメージを想像させ、教師に不安を抱かせる点が取り上げられた。その後の話し合いで、参加者は自身の教育経験に基づいて、授業参観の実施を想定した際の期待や懸念について意見を交換した。次の「語彙の意味付け手法」に関する議論では、講演 2 で取り上げられた実証研究の事例で、教師が参加者に対して語彙を説明する様子が紹介されたことを受け、「語彙を学習者にどのように説明するか」という議題について各グループで話し合いを行った。議論の進め方にも工夫を設け、「PLACEMAT」と呼ばれる手法を試みた。これは、紙面上の枠内に各参加者が考えを書き込んだ後、グループ内で共有し、最終的に共通意見をまとめるというものである。これらの活動を通じて、多様な語彙の説明の仕方を学べただけでなく、それぞれの説明の仕方が持つ長所や弱点が明らかになった。

### 【講演 3】

三日目午前に行われた講演 „Unterrichtsanalyse und -reflexion durch videobasierte Fallarbeit“ では、録画を用いた授業分析に焦点が当てられた。講演内容は「授業録画の活用」と「録画に基づいた事例分析 (Fallarbeit)」の二部構成で行われた。前者の「授業録画の活用」についての講演では、録画の活用方法として三つの観点が挙げられた。第一に、理論的なコンセプトの具体的理解のためなど、参照対象としての活用、第二に、試験に使用する分析課題や、また学習者の能力評価・教師自身のスキル評価などに使用する評価基盤としての

活用、そして第三に、授業分析を行うにあたっての、専門的観察と気づきの訓練のための活用が紹介された。後者の「録画に基づいた事例分析 (Fallarbeit)」についての講演では、その目的を明らかにした後、実際に行われた具体例が紹介された。最後に、録画に基づいた事例分析を行うことによる利点と限界点がまとめられた。利点としては、授業内でのインターアクションに対してのより敏感な分析や、理論的コンセプトの発展・調整が可能になることが挙げられた。一方で限界点としては、包括的で一般化可能な記述が難しいことや、規範的期待に応えることの難しさなどが指摘された。

### 【ワークショップ2】

ワークショップ2では授業内でのルーティンが取り上げられた。まず DaF ゼミ参加者はペアワークを通じ、各自の授業ルーティンについて共有した。その後、参加者全体で授業にルーティンを取り入れる利点と欠点について議論を行った。利点としては、表現や活動内容の繰り返しによる安心感が学習者への負担を軽減し、円滑な授業展開を可能にする点が挙げられた。一方で欠点としては、授業活動が機械的になり、能動性に欠けた授業になったり、インターアクションの可能性を狭めたりする、いわゆる「授業のコルセット」としての働きが指摘された。そのうえで、教師が学習者との会話において無意識に用いてしまいがちなIRF (Initiation, Response, Feedback) 型のルーティンに焦点を置き、IRF ルーティンがもたらす弊害を確認した。グループと全体での議論を踏まえ、その打開策として、学習者の回答の言い換え、抽象化、もしくは内容の拡張などの手法が紹介された。

### 【ワークショップ3】

ワークショップ3では協同学習 (Kooperatives Lernen) が焦点になった。まず、協同学習の起源と定義が紹介された後、協同学習の方法論的基盤として、Think-Pair-Share の概念や、個人がグループ内で特定の役割を担うことの意義が説明された。そこでは従来までのグループ活動との違いとして、特に以下の三点が強調された。第一に、個人ワーク、ペアワーク、グループワークと全体の活動が段階的に構成されていること、第二に、各グループ構成員の責任と相互的な頼り合いの関係が活動に必要とされること、そして第三にランダムの法則 (Zufallsprinzip) に則り、グループ構成からグループ内の役割まで、全員がどのような役割にも対応できる準備が学習者に求められることである。ワークショップ中の話し合いでは、授業でグループ活動を行った経験を共有し、実際に講演で紹介されたグループ活動のメソッドを DaF ゼミ参加者が実践することで、その効果を実感した。こうしてこのワークショップでは、協同学習について、理論的枠組みから具体的なメソッドまでを概観した。それにより協同学習について深く理解することができ、参加者自身の実践経験をもとに、その効果や課題を検討する機会を得ることができた。

## 2. Goethe-Institut 及び DAAD からの挨拶と案内

初日午後には、Goethe-Institut の代表として丸山智子氏と、DAAD の代表として渡辺脩太氏により、それぞれの機関が紹介された。Goethe-Institut からは活動内容及び各種サービスについて、DAAD からは活動内容及び奨学金について案内が行われた。

## 3. 参加者による発表

二日目午後には参加者による研究発表が行われた。発表タイトルは以下のとおりである。

- Shinji Nakagawa: Lebenslanges Lernen vom DaF-Lehrenden im interdisziplinären Kontext der politischen Bildung zum Frieden
- Alexander Imig: Didaktik mit ChatGPT: Ein daten- und erfahrungsgestützter Überblick
- Tatsuya Ohta / Akira Kusamoto / Naoko Kajiura: Identitätsentwicklung und die potenziellen Chancen von PLGs für die Professionalisierung von Deutschlehrenden in Japan

## 4. 総括

第 29 回ドイツ語教育研究ゼミナールは、Siebold 教授を中心に、参加者が自由に意見を交える活気ある雰囲気の中で開催された。ゼミナールでは、ドイツ語教育の専門性、国際的な教育協力研究、録画資料の活用を中心的に学び、全ての講演やワークショップにてグループ討議と全体討議が行われた。また Siebold 教授の導きの下、各討議の場面で様々な活動案を実践した。講演や参加者同士の討議から獲得された知見は大きな学びにつながる有意義なものだった。さらに本ゼミナールは Goethe-Institut から丸山氏、DAAD からは渡辺氏と Janczak 氏を招いたことで、ドイツ語教育界を牽引する機関間の交流を深める機会ともなった。このゼミナールで得た知識や経験は、各参加者の授業運営の基盤となるに違いない。なお、ゼミナールの実施にあたっては、日本独文学会、DAAD、ドイツ語学文学振興会、Goethe-Institut から多大なご支援を頂いた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

小西優葉（上智大学）